



○「道楽」

「道楽」を『広辞苑』でひもとくと、「①本職以外の趣味などにふけり楽しむこと ②ものずき ③酒やかけごとなどの遊興にふけること」とあります。その意味から道楽者、道楽息子という言葉もあります。あまりいい意味では使われていないようです。「道」がつく言葉はいろいろありますが、ここでは柔道、剣道、華道、茶道、武士道のように日本の伝統文化に関わるものに注目したいと思います。



この場合の「道」は、『広辞苑』の「道」の意味の中の、おそらく「方面、分野、そのむき、(使い方の例)その道の達人」になるのでしょうか。また「(道のりが転じて)人が考えたり行ったりする事柄の条理や道理」という意味もあるので、そちらも混じっているかと思います。

「道を究める」と言った場合の「道」も、修行や修練がともなう柔道、茶道などの「道」のイメージかと思います。修行や修練には「守・破・離」という段階をあらわす考えがあります。「守」は、師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に基本を身につける段階。「破」は、師や流派にこだわらず良いものは取り入れて発展させる段階。「離」は、流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させていく段階。

そういう段階を経ながら、つらく厳しい修行や修練の末に到達することを「道を究める」というのでしょう。厳しい道のりだったからこそ、やり抜いたからこそ見ることのできる新しい景色。それを楽しむ感動こそが「道楽」だと思っています。挑戦し、考え、努力を重ねたからこそその感情です。

学問や勉強もそうだと思います。「ローマは一日にしてならず」「学問に王道なし」…学校での勉強も、勉強道です。知識の習得だけでなく、主体的に思考したり判断したり表現したりすることを重ね探究していく中で、悩み苦しみながら努力を重ねていくことで、本当の意味で学んでいて楽しいと思える時がやってくるのだと思います。部活動も同じです。

サッカー日本代表の監督だったオシム氏は、考えて走るサッカーで日本サッカー界に旋風を巻き起こしました。サッカーは足でやるスポーツではなく、頭でするスポーツとし、ただ走るのではなく、試合で起きる様々な状況の変化に応じて、選手個々がどう考え判断するかが大事なスポーツとされていました。今のサッカー日本代表の久保健英選手も、スペイン留学で常に主体的に考えていないとついていけない練習で上達したという話を聞いたことがあります。何事も「待ち」の姿勢でなく、挑戦していく主体性、究めたいという志が大事だということです。

昔のイタリア映画に「道」というのがあります。はじめて観たのは40年近く前ですが、映画にかつてないメッセージ性を感じました。そのメッセージが何か見るたびに思いが変わる映画です。貧しいイタリアの沿岸部で暮らすジェルソミーナが、口減らしもあって旅芸人のザンパーノに売られるが、怒鳴られながらも芸人の仕事を覚えていく。そして、粗暴で酒好き、礼儀も優しさもないザンパーノに尽くすも、あることをきっかけにジェルソミーナが心を壊していく。そんな物語です。「道」の映画の音楽は、フィギュアスケートの高橋大輔選手がバンクーバーオリンピックで使っていた曲なので聞いたことがある人もいます。高橋選手は、銅メダルを獲得するまでのこれまでの厳しい道のりを思い出しながらこの曲で踊ったと思います。映画のタイトルがなぜ「道」なのか知りません。しかし、どんな道も前を向いて歩いていけば何かが見えてくるはずですよ。

先日国宝松江城マラソンに出場しました。いろんな選手のTシャツの言葉にも励まされながらなんとか完走しました。一番印象に残った言葉が「しんどさはやがて消える。あきらめた気持ちは一生残る。」という言葉でした。30キロ過ぎから何度もこの言葉が頭をよぎりました…